

随筆部門選評

今年も、自分の思いや考えを言葉で紡いだ作品を、大切に読ませていただきました。いくつになっても、何かに挑戦していく姿は、美しいと思います。身の回りや自分自身を見つめて、題材を選び、文章を書いて推敲し、作品を仕上げていくご努力に心から敬意を表します。

今年度の応募は、過去十五年間で一番多い二十九作品でした。長く続くコロナ禍で、書くことの良さを再発見されたことや、オンラインでの応募が可能になり、遠くの方も出品されるようになったことが、その一因であると思いました。手書きの方が三名あり、オンラインとは違った味わいがありました。多くの方が意欲的に投稿してくださったことに感動しました。

今年度も広域でしかも幅広い年齢層から応募いただきました。県内十六点(大垣市五点)、県外は遠く北海道や佐賀県からの応募も含めて十三点となりました。年齢では、八十代三名、七十代九名、六十代七名、五十代四名、四十代二名、二十代二名、十代二名です。

若い方の投稿も増えて、作品内容がより充実したと感じました。

内容は、コロナ禍での取り組みや、老いを見つめて終活を意識したもの、両親への愛情、精神的な悩み、身の回りの出来事や生きることへの不安、人間形成を左右した読書について等、多岐にわたっていました。書き慣れた感じを受ける作品が多く、自然に文が流れて、無理なく書かれている印象を受けました。自分の思いが読み手に伝わるように工夫が凝らされていました。中には、高

校生の新鮮な感覚で書かれた作品や、一途に故郷の芸術家の姿を追った八十代の方の作品もありました。いずれも書き手の熱意を感じる作品が多く、真摯な姿勢を感じました。

読みごたえのある作品ばかりですが、課題として感じるのは次の三つです。技巧を凝らしすぎてかえって読みづらくなっていること、物語的な要素の多い書き方で主題に迫れないこと、説明不足で筆者の主張が不明確なことです。

選外になりましたが、樋口健司さんの「本の精」は、古書販売市場で出会った老人に惹かれていく青年の姿を描いたもので、文構成が巧みで読み応えのある内容でした。今枝明子さんの「シマちゃん」は、冬眠をし損ねたシマヘビに対する気持ちの変化を描いたもので、展開がスムーズで温かさを感じる作品でした。戸田和樹さんの「引越しと日記」は、大切に残されていた日記を通して、深い親の愛情を感じる筆者の姿が浮かんでくる作品でした。

どの方も前向きに人生に対峙して、よりよい作品づくりを目指してみえました。応募者の皆さんの真摯な取り組みに心から敬意を表するとともに、来年度も生活を見つめた感動ある作品の応募を期待しています。

文芸祭賞「ちんじゅう」

林 峯子

東三河の方言「ちんじゅう」。ウエーブの髪で学生時代は誤解を受けますが、生まれつきの髪の良さを前向きにとらえて、若き日の辛い思い出も、懐かしく愛しむ作品です。テンポの良さ、分かりやすい文章、タイトルも効果的で、一つ一つの事実が、読み手の心を捉えていきます。

秀作「父のにおい」

山河 由美子

コロナ禍前の父の死を通して、父の優しい人柄を、愛情をこめて描いています。父専属の床屋となった娘は、映像では残せない記憶に残る父のにおいを愛します。父の写真とにおいを対比させて、筆者に残る父のにおいを引き立たせています。

秀作「こわもてだけど」

竹村 京子

何かよくわからない柑橘系の大きな実。調べると鬼ゆずと分かり、ジャムづくりに取り組みます。鬼ゆずの存在感が大きくなっていく様子を楽しく描いています。タイトルも良く、次を読み進めたくなる作品です。

佳作「ぼっくり死にたい」

後藤 順

身寄りのない叔母のために老人病棟に寝泊まりする筆者。老人たちの姿を前にして、死を現実のものと感じていく姿が描かれています。体言止めや比喩などの表現技法、幻想的な場面設定など、優れた表現力を感じる作品です。

佳作「マタニティマーク」

進藤 拓

子どもをなかなか授からない夫婦の思いが、マタニティマークを使って効果的に描かれています。会話での心理表現も巧みです。相手を慮ることの大切さが、読み手に伝わるように描かれています。

佳作「四十五年ぶりの謄写版挑戦」

安藤 邦緒

物置で見つけた謄写版用具一式。ガリ版印刷に挑戦する様子から、生き生きと仕事

に取り組んだその頃の筆者の姿が浮かんできます。鉄筆で蠟原紙に文字を書く音が聞こえてきそうな作品です。

佳作「街角に華咲くモダン」

宮島 早苗代

各地にある郷土の芸術家「矢橋六郎」の大理石の壁画を巡って、その壁画の意味を深く考えた作品です。傘寿の筆者の行動力と情熱が、びっしり書かれた手書きの文字からも伝わってきました。

佳作「校内の農場に放置されていたダイダイ〜ジャムを作ったこと〜」

前原 侑香

放置されていたダイダイの実をジャムとして開発し、販売まで成功させた高校生の挑戦を生き生きと描いています。次々に商品化していく姿が、リズム感のある文章で展開されて、若さあふれる作品になっています。

審査員 大石 英文

今津 佳代子

詩部門選評

多くの作品は、慎ましく発せられる細やかな言葉が、読み手のこころを深く揺り動かすことがあります。

今年も佳き作品が集まりました。詩情のある独得のイメージの作品は、静けさの中で聴きいる精神性のある世界を暗示していました。

文芸祭賞『砂』

時空を超えた思惟的な美意識がありました。風という時間のゆくえは消え去るものです。砂はその風によって痕跡をのこすものです。しかし、そのような表層的なものではなく、もつと思考を深めた作品は、一瞬と永遠を潜ませた不滅の物語で、むしろ内在する人間の心理に及んでいました。

秀作『湧水』

この作品のもつ普遍性は、日常気づかずにいることが多いのです。しかし生命をつなぐ一滴は、この地球を養っている重要なものです。壮大な俯瞰図の中の水は循環して、地上を潤しています。その湧水への慈しみが伝わってきます。

秀作『あたたかな』

ふと出会った偶然に寄りそってみたい作品です。

―生きていくことは／戯れていることか
この風景が教えてくれる―

しばらく固定観念から解放される想いです。この作品のもつ静謐な視点の語らいがいい。

佳作『黒い蝶』

黒い蝶を救世主の出現と感じたことの暗示がこの作品の重要なところでは。言葉の力でイメージの構図をとっています。蝶はだれかの使者だったと、視界の描写だけではなく、心の奥底にある秘めたものが浮き彫りになりました。

佳作『雲の名づけ遊び』

あたたかな母親との日だまりを胸に抱いて人生を送ってこられた、作者のほほえましい日々は、空・雲・人の永遠のめぐりの中にあるようです。

佳作『ポスト』

手紙を投函するポストは古びた町並みの角にあります。ポストに自分のこころを投函してしまうこの着想のよさが、一つのドラマになって広がりを見せました。

佳作『青い月』

出だしの詩情に惹かれます。

―月が大切な友達に思え―

この一行、このように月を愛する人は、古代から現代まで、この世に多くいます。だれもその美しさに心をあずけたくありません。普遍的な人間の深い想いが重なるところで。

佳作『母上』

母というテーマは永遠です。だれもが心に秘めたひとりの母に抱いた気もちは、様々ですが、この作品のもつ二人の関係にも、貴重な時間と尊い気もちの在り方、そして作者の強い決意が語られています。

佳作『坂ふたつ』

素直な作品に好感がもてました。坂ふたつの中の夏みかんの花が果実になるまでの詩空間は、情景と情感が匂うようでした。

審査員 富 長 覚 梁

椎 野 光 代

短歌部門選評

今回は出詠数三五六首でした。昨年と同じく今年も生活詠が殆どでしたので他の分野にも挑戦してほしいと思いました。短歌は題材に何を**選ぶ**かが第一歩です。次に選んだ題材をどのように詠むかが大切です。日常の暮しの中で多く題材をみつけるようがんばってください。

審査員 山 本 次 能

栗 山 繁

高 瀬 寿 美 江

俳句部門選評

新型コロナウイルス禍が続いております。一日でも早くマスク無しの生活ができるようになることを願うばかりです。

今年は一六三名・七六二句の応募があり、その内オンライン投稿は一〇三名でした。選者一同、一生懸命そして楽しく選句をさせて頂きました。

文芸祭賞「早苗待つ」。代掻きも終り田に水を満たした。後は早苗の来るのを待つばかり。田植前の緊張感を水の句に代表させた。我らの故郷輪中の一風景。

秀作「白寿女の」。人生百年時代と言われようになった。白寿の人の辞書の手擦れが酷くぼろぼろになっている。まさに愛用の一品である。その様子は文化の日にびつたり。

秀作「生きちを」。蛇は脱皮を繰返し成長する。その抜け殻は木の枝などに引つ掛かっており印象が強い。神秘的でもある。作者の変身願望を募らせたのであろう。

来年もたくさんのお投句お待ちしております。

審査員 田中 青志

森田 かずを

大堀 武直

名和 永山

川柳部門選評

ここに掲載された句を読むと、川柳とは、私達の身の回りのことを詠むということがよく分かります。特別なことを句にするということは殆どありません。川柳を創ってみませんかとお誘いをする、皆さんが「難しいから」という言葉が返ってきますが、この作品集を読むと難しい句は殆どありません。読んで「成程！」と理解できるものばかりでしょう。ということは、難しいと思っているのは書き表すことが難しいと感じているのです。しかし、ここでよく考えると、人間は言葉で考え、言葉でしゃべり、言葉で伝え、言葉で反省し、言葉で怒り、言葉で悲しみ、言葉で反省します。その言葉をリズムよく並べたのが川柳だと思ってください。

「朝起きて 顔を洗って 歯を磨く」

「いい目覚め 空を見ながら ガラガラペツ」
同じ朝ですが、表現が変わると舞台まで変わります。同じ場面でも、目が替わる、表現が替わる、思考が替わるなど、川柳の面白い所です。

作品評（武山 博）

文芸祭賞 大空へマスク外して深呼吸

三年に及ぶコロナ禍で、何処へ行くにもマスク、マスク、マスク・・・です。上の句の「大空へ」が「ヤレヤレもううんざり！」という気持ちを巧みに表現しています。九月からは外や混みあわないところでは外しても可といわれましたが、付けた外し方が面倒くさくて、外に出ないようになっています。

秀作 風紋は風が忘れた落とし文

中の句を「風が忘れた」と擬人化することで、風紋の印象を強くしました。これ以上自然を壊すなよ、と呼びかけているのですよね。日本では砂上に風紋が残る場所がありませんが、砂漠などの乾燥地帯では、見事に残ります。私には、詩的な月の砂漠が思い浮びます。

秀作 聞き上手人を裸にしてしまう

「佐和子の朝」という番組がありました。阿川佐和子さんが対談をする番組ですが、対談相手を、実に爽やかに裸にしてしまう問いかけ上手に感心しました。この方がわが社の面接試験官なら、と想像してしまいました。：ハラスメントなんて絶対ない。

秀作 不孝でもいまは立派な杖になる

成長のひと時では、反抗期で楯突いてばかりいたのに、このごろは、体が不自由になった親の面倒をよく見る娘（息子？）になりました。医者に連れて行ったり、買い物に付き合ったり、近所でも評判です。

秀作 日本とて平和ではない銃社会

安倍元首相が演説中に銃撃され命を絶たれました。その他にも、銃を用いた犯罪が発生しています。日本は銃社会ではありませんが、結構出回っているのですね。テレビ番組などで面白おかしく扱いながら、規制しているのもナンセンスですが、民主主義の国アメリカよりはましですかね？

秀作 陰で咲く花から貰う温い愛

朝早く、四十分ほどウォーキングに出かけます。その途中に何軒かの家の庭さきに、花が植えられているのに気付きます。背が高い花、中ぐらいいの花、這っているような小さな花など、時には立ち止まって眺めます。怪しまれる時間帯ですから本の数秒ですが、ホッと一息つくひと時です。時に「おはようございます」と声がかかることもあります。

審査員 武山博

草野稔

三浦珠美